

第一回研究会

さる三月十六日、中央大学会館二〇五号室で、「共通課題に関する各宿題委員によるコメント」というテーマで、第一回研究会を開催いたしました。蓮見委員より別掲のような報告があり、似田貝委員より地方在住の宿題委員の御意見が紹介され、司会島崎のもとに熱心な討議がありました。当日は事務局の不手際でテープ・レコードを用意することができませんでしたので、メモによって討議の概要を掲載することにしました。できるだけ忠実に表現しようとしましたが、限界がありますので、その点発言者の御了承をお願いします。なお当日の出席者はつぎの通りです。益田明美（明治学院大）、蓮見音彦（東京学芸大）、若林敏子（人口問題研究所）、高山隆三（慶應大）、米地 実（日本女子大）、佐藤常雄（東京教育大）、岩本由輝（山形大）、安原茂（成蹊大）、似田貝香門（山梨大）、高橋明善（東京農工大）、島崎 稔（中央大）、田野崎昭夫（中央大）、吉沢四郎（中央大）。



討論

（島崎＝司会） 蓮見さんのご報告に対する質問からはじめます。

（安原） 直系家族＝家父長家族と理解してよいのか。

（蓮見） 家族類型という形態面で把えるならそういうえる。もちろん家族内の人間関係は秋田・岡山の意識調査にみられたように変化している。したがって、形態がそうでも家族内の人間関係といった

内容からみて、家父長的家が今日まで存在しているとは理解しない。

家族形態、相続制に連続性があるとみており、この局面では「家」といってよろと考えていい。

(安原) 蓬見の報告にある「核家族」も単純な形態規定として用いてくるのか。

(蓬見) その通りだ。

(島崎) 家族の論議はさらに続けていただきとして似田貝さんより地方在住の宿題委員の方からの御意見を紹介していただきたい。(似田貝委員の紹介は別掲したので省略します)

(高山) 小池会員から電話で、課題に関連して、前からの関連も大事だが、現在、家をとりあげる意味をつかめるように、課題設定の意義について充分討議していただきたい、との伝言がありました。

(島崎) 去年の課題の一環とどう理解と新しい課題と理解する立場とがある。継続をありかざしてやれるか疑問を感じる。都市を掲げながら成功した例がない。都市に切りこめなかつたむずかしさがある。小池会員のご意見をふまえて議論したらどうか。

(高山) 昨年の報告は、日本資本主義と農業になつていた。都市

と農村を資本蓄積と農業とどういうように把えた。蓬見さんの今日の報告では農民層分解がとりあげられた。家族構成をもつた農民経済の解体を抱えない、農民層分解の全体が明らかでない。家族をとりあげることは農民層分解を明らかにすることだ。

(蓬見) 家の問題を裸でテーマにするといろんな視角からアプローチが可能で、どこへゆくかわからない。梓をどうはめるかが問題だ。

で、去年の延長とどう枠を始めた。

(高山) 今年度は、戦後の実態をつみ重ねていった方が、より生産的でないか。

(島崎) 前の合同委員会で2年間やるべきは古い方からやりたいとの意見があった。

(蓬見) 現在からやった方がいいのではないか。

(高山) 実態の整理をして、古い方にさかのぼる方がよい。

(島崎) 昨年の大会の際の委員会で出されたのは、発想が逆ではなかつたか。

(若本) 現代からあがつても抵抗は感じない。歴史もやると時間をとつてしまつ。

(蓬見) 小池会員が指摘された家族をとりあげる意味が、歴史をさきに出すとわからなくなるのではないか。

(安原) 村の解体の論議がつづいてきたが、農民とは何かを考えようという発想があるのでないか。この辺で家なり家族を攻めてよるのでないか。根本の村なり農民をどう考えるかを明確にすればよしのではないか。

(島崎) △村の変化の推進力△といふ課題設定のしかたに当時疑問を感じたが……。高山会員の△どういう農民層分解論の立場からとどういうように一致していいか疑問だ。△推進力△といつてもまたに村研で議論したときと四十年代とでは思想は異なつてくると思う。

(若本) 推進力は生産性向上から農民運動まですべてを包含して

じた。

(高山) 現時点では、条件の変化をふまえて、農民層分解を家との関連でとりあげたらどう希望がある。家を現在とりあげる意義は学問により異なっているが、私は分解論の立場からみてくる。

(島崎) 農業労働力の自立化といつたとき家が関連してくる。
(高山) 家、家族をとりあげたとき村がうきぼりにされてくるのではないか。去年も家をとりあげなかつたことが、村研的意味で村を明らかに出来なかつたのではないか。

(島崎) 推進力とくら課題を設定したとき、とりあげるべき家がとりあげられなかつた。四〇年以降、農業、農民、農村の在り方は、そういうものをおしつぶすような事態で、小土地所有者の主体的な展開を許さないような資本の収奪がおこなわれてゐる。この事態の中で改めて主体をとりあげようとした。

(高山) 自作農の否定と村との関係を、日本資本主義の発展の方へで位置づけてみることが必要だ。

(島崎) 四五年以降、特に現時高蓄積のメカニズムの変化が問題とされてくる。高度成長の持続として理解するか、高度成長が変化したと理解するのかまだ問題である。家を問題にすることは、高度成長過程での農民家族をとりあげなかつたことを改めて追求することなのか。

(高山) 四五年以降、蓄積のメカニズムが變つたとしても、その実態をどう把えるかは問題だ。しかし、高度成長下の家族の実態は明らかにする必要がある。

(島崎) 新全総を強行できない事態はある。

(高山) それは昨年の大会でもっとあり上げてよい問題だった。
(似田貞) その問題意識で、去年の課題を設定したのだ。現状における地域開発の共通論点を出すことを考えていた。その場合、就業構造、労働問題、地域生活の諸問題などを整理することを考え、村落は具体的領域として設定できると考えた。

(島崎) 家族を意識的にとりあげることが必要だ。

(高山) 現状の把握として、対立の内部構造としての村落をとり上げる。

(似田貞) これまでが大きなテーマだったから、家をとりあげるのか。

(島崎) 両方の理解がある。両方を満足する必要がある。たとえばくわゆるJターンがいわれるが、農業にはもどらないとくら現実がある。Jターンが何故おこるのか。こうじう事例が報告されて、全国的にも検討しておく必要がある。

(岩本) ロターンは建物としての農家にもどつても農業にはもどらなさい。

(島崎) 具体的事例で農民層分解を考える必要がある。

(岩本) その場合平場でみると、山村は特殊な条件があり困難でないか。

(蓮見) 筋を通しておけばよし。

(似田貞) 都市と農村の問題を、もう一つつめるものとして家族が出てきたと理解してよいか。

(岩本) 都市と農村は面白くないから、家をとりあげよといふ意見もあるのではないか。

(高山) 宿題委員会が方向づけては問題がおこらないか。

(島崎) 現在、家族論が重要視され、流行している。村研がこれと無関係に存在するわけでもない。農村を離れて家族論が流行していくのでもないだろう。

(吉沢) 課題の設定に理解の相違があつても、農民家族の実証的なモノグラフが提示されれば、村研会員の関心にかなうではないか。

(高山) 戦後のモノグラフでつめてよいのではないか。

(岩本) 資本を抜きにして農村を語れない。

(似田貝) 高山会員の提案でゆけば、現段階にしほって、農民層分解を枠として問題をたててゆく。具体的な接点が家と理解してよいのか。その場合、問題は何から議論していくかだ。私は就業構造、労働力、地域生活をとりあげていくことが考えられる。

(高山) 農民層分解は経済的局面で割切っているが、自作農民の解体といった場合、家族、社会関係の解体をふくめている。これまで経済的局面でつかまえていたことが不充分だった。この意味で、家を媒介として入れるのがよい。

(島崎) 家をどう入れるのか。“小企業農”が検出されたとき、

家族労働の評価つまり労賃範疇として確立していくかどうかが問題なのだ。家はいまそれほどの意味をもつのだろか。消費の枠としての世帯としての意味はあるが、ネガにもポジにも家の問題が出てかかるてくる。

こないのでないか。

(蓮見) 家で把えるのがよいか悪いかは問題があるが、家を前提として考える農民の場合と、世代的に家から独立した農民の場合がある。これは農民の基底が異なるからで、家族が異なるからではない。戦後は複雑だからひとつのアイテムとして家族をとりあげ追求することに意味をもつ。

(似田貝) 大会にこれが一本あることはよしだが……

(岩本) 共同体のないところに家はない。

(蓮見) そう簡単にわりきれない。

(島崎) 社会学的には、たとえ老人問題と家族といふように問題になる。

(蓮見) 特殊研究として取上げることはそれでよい。

(高山) 土地改良を通じて耕地の独立性が戦後強化されている。しかし完全に独立しているのではない。水田の場合、水利のもつ共同性とからみ、家産としての家もひっかかる。

(島崎) それがもつ重要性は評価する必要がある。

(高山) 共同性があるときの家をはつきりさせなければならない。(島崎) 低賃金労働が出てくるとき零細な土地所有が意味をもつが、家族はどんな意味があるのか。

(岩本) 共同に農業経営者として個人が参加している。

(高山) 家ではない個人としての位置が明確になればよい。自作農の性格にどうしてもかかわりをもつ。土地所有の性格や家がひつかかるてくる。

(岩本) 自作農は農外収入がないときに“家”が意味をもつてゐる。分解基軸が上昇し、“家”としての意味は家計の単位という意味になつてゐる。

(高山) 自作農の家族と小企業農の家族に差違はあるのか。

(岩本) 小企業農は單一なのか。

(高山) 小企業農は單一だ。しかし梶井氏のいうようになれるのか。

(島崎) 梶井氏がいうのは、四一年ぐらいの上昇をつけさせていた米価のとき利潤を問題にした点だ。

(高山) 利潤簿帳が成立するかどうかを問題にすれば、それは体制的な問題だ。

(岩本) 共同性が現われながら崩壊するところに“家”的問題があるのではないか。
(高山) 個人で全部割切れるか。
(岩本) 家という意識をもつのは三十代、四十代で、若い層にはその意識がない。

(安原) 小企業農、旧型富農といったこともあり、形態的にはいずれも家族経営だ。したがって、労働力、就業構造で性格規定をする必要がある。現段階の農民層分解とかわかる問題である。家族協定農業がほとんど解体していく現象をみると、農民に合理的な観念があるのかどうか、こうじう点もはつきりさせたい。蓮見会員の出した枠組みを基準として、家族の内部関係の具体的展開ができるないか。自作農という形態をとつてゐるが、家長権、労働、役割、家意識と

ひきついた攻め方が、今度の課題で出でる。
(高山) 農民年金には主婦は農業をやっていても加入できない。経営主は出稼ぎに出ても受給資格をもつてゐる。
(岩本) 法律の方が家意識をもつてゐるのではないか。
(高山) もしそうなら主婦から要求が出でよくなはないか。ドイツでは主婦は農民年金の受給資格をもつてゐる。こうした問題をひとつひとつ攻めてゆく必要がある。

(蓮見) 家族の内部構造を改めてゆくのはどうか。都市家族を攻めると、バラエティがあり、明確にならぬのではないか。

(安原) 就業構造を明確にしなければならない。
(似田貝) 新しい分析視角を出すとすれば、農民層分解の周面を変えることが必要である。今まで生産、経営の関連で自作農体制を問題にしてきたが、新全総以後、新しい地域開発政策の中で、土地所有の意味が変つてきている。

(岩本) 山形では市街化区域と調整区域の線引きをさし、市街化区域に入れると農民が争つた。

(似田貝) 上からの土地所有が問題になる。資本にとり小所有が邪魔になるという観点を入れておかないと、戦後の総括だけでは今後が展望できないのではないか。

(島崎)

土地問題について、共産党は土地改革として提案し、小土地所有を守る政策を出している。労働者の居住をも確保する新しい土地政策が、農民問題としても提起されている。

(似田貝)

家族を追いかけて、その問題が出てくるのか。

(高山) 現在、家をとりあげる意義はどこにあるのか。

(島崎)

農業解体の側面だけで問題にしてよいのか。

(安原)

出稼ぎは都市の多就業家族と同じとみてよいのか。土地所有という点を問題にしないでよいのか。

(岩本)

出稼ぎが出ばならない理由の一つに失業保険がある。

(似田貝) 農村を農業とみる場合と地域とみる場合で理解が異なる。都市再開発みると、駅前の零細小営業者の資産を独占が取得する結果になっている。原発地をみると、原発側は農業の数多の土地を買上けるだけで、農民は村を出るのではなく他の職業を求めてくる。こうした地域では内部の農民層分解よりも計画優先の外部の力がつよくなっている。

(岩本)

原発が地元にきても高度な労働に農民は適さない。酒田の工場誘致の場合、工場側が必要とするのは労働集約的生産に適する女子労働力で、男子労働力は工場建設のときの土木建設労働に必要とするのが現状だ。

(似田貝) 「都市と農村の対立」を課題にしたのは、資本蓄積の中での「地域」を問題にすることを意図した。

(島崎)

「地域」という言葉は無概念だ。そういうときも少し概念を厳密に、強いていえば、「地域」は資本のファンクションではないのか。

(蓮見)

農民以外をふくむ非農家が拡大してきたので地域を考える必要がある。

(高山) 資本蓄積のメカニズムが主導で農村を変貌させていくのに対し、農業内部の変貌をとりあげていない。そこでこの問題がでてきた。

(島崎)

農民を問題にするとき、農民の内的な発展性を探ることが重要だ。

(高山)

農民の主体的なものをとらえるための農民の分析が必要だ。その場合独占をどう位置づけるかが問題だ。

(島崎)

これまでの討議で、大会のもち方について二つの問題がある。一つは現状からさかのぼるということでしょうか。二つは農民層分解と家・家族との関係に集約してよいかという問題だ。

(安原)

研究会のもち方について、小池会員のいうタームの規定を初めから取上げてよいか問題だ。蓮見会員のアプローチがなされたので、これを具体的にすすめたらしいと思う。

(蓮見)

戦後の自作農の「家」、その変貌過程についてどの辺に問題があるのか、理論的にも整理して欲しい。

(島崎)

課題がいつめられないと、もり上りのないまま大会に入

る危険性がある。

(高山) 報告は戦前の方がやりやすい。

(蓮見) 戦後の家族のモノグラフは少ない。

(高橋) 村の中での家が問題だ。二年間でないと調査の関係もありつゝこめないのでないか。一年目は枠組みづくりでよいと思う。

(島崎) では時間もきましたので、本日の蓮見委員の報告と地方在住宿題委員の意見、それに本日の討論を次号の「通信」にのせ、村研会員のたき台にさせていただくことにいたします。次回の研究会は通信発行後に東北で開催していただき自由討議していただき、その東北の研究会の成果をふまえて、東京で第三回研究会を開くという段取りで今後すすめたいと考えますのでよろしくお願ひします。

(文責 吉沢)

